いの流水俳壇

友草　水月　選

季題　終戦七〇周年に寄せて「終戦忌、原爆忌」

人類は神の火手にす原爆忌　大川　節弥

（評）人類は太古より火を神として祀り畏敬してきた。米国はその神の火を原子爆弾として利用し広島、長崎に投下し一瞬に20数万の死傷者を出した。世界の国々で核兵器不拡散、核廃絶が叫ばれ、安倍首相も戦後70年の談話で世界で唯一の被爆国として核不拡散と廃絶を訴えた。なお原子力発電（原発）は全世界で多く稼働している。東日本大震災で事故が起きた福島では今も放射能汚染で避難生活を余儀なくされている。一日も早くその解決を望みたいものである。

○片脚のバッタが歩く広島忌　井上　土筆

海に消ゆ君の面影敗戦忌　津田　久美

（評）先の戦争で海で散った友人、知人、彼氏だったのか。あの若々しい青年、70余年前の面影を思い出している今日である。海戦といえば1942年ミッドウェー海戦に日本軍は大敗をし以後戦争の主導権は米国に移り、日本軍は後退を続けた。翌年山本五十六司令長官は機上で戦死した。太平洋の島々の戦争で約148万人余りの軍人が犠牲となった。（高新8月16日付）

私たちはこの戦争を二度と繰り返してはならないし、また若者に伝え風化させてはならない義務がある。

○暮るるまで蝉鳴き通す終戦日　下村ひろし

叔父吹きし草笛いつも「海ゆかば」　間　浩太

（評）叔父がいつも吹く草笛は「海ゆかば」の曲であった。今は亡き往時のやさしかった叔父を瞼に思い浮かべ懐かしんでいるのである。

「海ゆかば」と言っても知らない方が多いと思う。歌詞は、大友家持の万葉集の長歌の一部からとられていて、戦時中、学校や職場、軍隊では歌ったものである。歌詞を紹介する。

「海ゆかば水漬く屍、山ゆかば苔むす屍、大君の辺にこそ死なめかへりみはせじ」

解釈すると、海戦で戦って死んで水漬けになっても、山で戦って死んで苔にうもれても、大君のために死ぬのは何も悔いはない。戦争中によく言われた滅私奉公の精神で、戦意高揚の歌であった。

○草笛の船霊さまを呼びにけり　島井ひろし

歌い継ぐ「長崎の鐘」原爆忌　岡村　嘉夫

（評）70年前の8月9日11時2分長崎市に世界で二番目の原子爆弾が米国により投下され一瞬にして約7万人の死傷者が出、街は焦土化した。この原爆でカトリックの信者で医学博士の永井隆と家族は被爆し、妻は死亡した。子ども二人は助かったが博士も被爆し残された子ども二人との生活を綴った「この子を残して」「長崎の鐘」の著書がある。「長崎の鐘」の本をもとに作詞作曲されたのが長崎の鐘である。歌手の藤山一郎は博士の病床を訪ねこの歌を披露したそうである。

（長崎の鐘）

一、こよなく晴れた青空を
　悲しと思うせつなさよ
　うねりの波の人の世に
　はかなく生きる野の花よ
　なぐさめ励まし長崎の
　ああ長崎の鐘が鳴る

二、召されて妻は天国へ
　別れてひとり旅立ちぬ・・
　やがて永井博士も二人の子どもを残し
　天国の妻の所へ旅立たれた。

○原爆忌祖国の歌を聞く夜かな　ガルシア繁子

二句抄

南方に祈りを捧げ終戦忌　川村　博子

裏山に声を広げて法師蝉　石原　静

天井を眺めて十月夏の来ぬ　國田　貞子

名古屋場所座布団飛んで皆拍手　田蔦恵美子

靖国の杜さわがしく終戦忌　小野川町子

炎天下雑音止まる午後一時　森岡　照月

終戦の噤んだ口を綻ばす　刈谷　志津

七十年武蔵発見夏の海　片岡　包女

風化することの怖さや原爆忌　竹崎たかひろ

ふる里に思ひは馳せり盆の月　間　浩太

終戦忌犠牲のうえにきた平和　津田　久美

初秋や軽い足取り今朝の朝　大川　節弥

一筋の川海に入る秋暑し　岡村　嘉夫

玉音の記憶八月十五日　友草　水月

軍国で嫁ぐも密か「つづれさせ」

草木の萎し炎天人置かず

玉音の今に新鮮耳の底

よさこいの熱波猛暑をぶっ飛ばす

雷烈し腕直角の平和像

やわらかきピアノの音色合歓の花

一山を一つの音に蝉しぐれ

轢かれじと道端へ寄す蝉骸

誰が為の滅私奉公敗戦忌

玉音を昨日の如く敗戦忌

次　題　「当季雑詠」
締め切り　毎月5日

投句先
教育委員会事務局
いの町1700－1
☎893－1922

有料広告

医療法人
光生会
森木病院
院長　森木光司

内　科
外　科
小児科
循環器内科
消化器内科
リハビリテーション科
人工透析

吾川郡いの町3674　TEL(088)893-0014